

【論文】

通りすがりの女性

——アンドレ・ブルトンの人生と作品を横断するシュザンヌ・ミュザール——

泉谷安規

Un éclair...puis la nuit! – Fugitive beauté
Dont le regard m'a fait soudainement renaître,
Ne te verrai-je plus que dans l'éternité ?

Ailleurs, bien loin d'ici! Trop tard! *jamais* peut-être !
Car j'ignore où tu fuis, tu ne sais où je vais,
Ô toi que j'eusse aimée, ô toi qui le savais !

Charles BAUDELAIRE, 《À Une Passante》¹⁾

序—シュルレアリスムの作品と活動における男性と女性

その全活動を通して、「詩、愛、自由」をスローガンとして掲げていたシュルレアリスムであったが、こと「愛」、女性への「愛」については、男性からの女性への一方的な崇拜にとどまっていた感は否めない。少なくとも、初期シュルレアリスムにおいて、創作活動の主体は男性であり、女性はその対象、ないしはミューズや霊媒であった。典型的な例は、1929年『シュルレアリスム革命』誌の最終号に発表された「私は森のなかに隠された(……)を見ない」であろう。このフォトモンタージュ作品では、周囲を主だったシュルレアリストたちの男性が取り囲んでいる。ルネ・マグリット描くところの、右手を胸に当て、顔をそむけた全裸の女性の絵が中心に配置されている。周囲の男性シュルレアリストたちは、祈るように、あるいは見ていけない聖なるものに敬意を表しているかのように、全員眼をつむっている。エロティシズムと敬虔な祈祷が混合された作品であろう。女性を理想的対象とし、彼女に賛辞を捧げているのである。

同じような構図の作品がある。1924年のフォトモンタージュ作品である。こちらも男性のシュルレアリストたちの写真がちりばめられているのであるが、中心に配置された主役はジェルメーヌ・ベルトン (Germaine Berton) の写真である。周知のように、この若い女性アナキストは、右翼の雑誌『アクション・フランセーズ』の宣伝部長を襲撃した犯罪者なのであるが、この作品のなかで、シュルレアリストたちは政治的な敵対者に攻撃を加えた勇敢な女性に対する賛同と敬意を表

現するとともに、この作品自体が世間に対する過激な政治的挑発行為となっている。しかもここにはボードレールからとられた、一見作品とはそぐわない、皮肉な、あるいはむしろ存外真面目な以下の一節が加えられている。「女性は、われわれの夢に最大の光と影を投じる存在である²⁾」。

以上の二つの作品は、作風とその与える効果が正反対であるが、いうまでもなく、明らかな共通点をもっている。まずは、作品の構図である。周囲に男性シュルレアリストたちが揃い、中心に女神あるいは女性犯罪者がいる。そして次に、この構図から見えてくる、作品における男女の立場の決定的違いである。どちらの作品も創作の主体は、おそらく周囲にいる男性シュルレアリストたちであり、中心の主役の女性たちは偶像、賛美の対象にとどまっている。彼女たちは、中心にいながらも、あるいは中心にいるからこそ、徹底的に静止的であり受動的であることを免れない。あたかも、偶像崇拜の儀式の神あるいはトーテムのように。あるいは彼女たちは、男性シュルレアリストに宣託を伝える霊媒や巫女なのかもしれない。

これは初期シュルレアリスム活動に顕著な特徴であり、20世紀初頭という時代を考えてみても、いささか度が過ぎるように思われる。20世紀初頭という時代には、社会や芸術領域において、自立して積極的に活動していた女性は、すでに数多くいたことは今さら言うまでもない。そして、この頃のシュルレアリスム活動に参加して主体的役割を果たしていた女性たちもいたのだか（ブルトンの最初の妻シモーヌもその一人である）、やはり圧倒的に数は少なく、またマージナルな存在でしかなかった。むしろ、シュルレアリストとしての女性の積極的な活動が目立ってくるのは、第二次大戦以降であるように思われる。例えば、女性シュルレアリストについての研究書を書いたカリストが取り上げているのは、ドラ・マール (Dora MAAR, 1907–1997)、リー・ミラー (Lee MILLER, 1907–1977)、メレット・オッペンハイム (Meret OPPENHEIM, 1913–1985)、クロード・カーン (Claude CAHUN, 1894–1954)、ユニカ・チュルン (Unica ZÜRN, 1916–1970) などであるが、シュルレアリスムの精神を受け継ぎ、男性以上に挑発的で過激な活動をするこれらの女性が登場するのは、シュルレアリスム運動の中期以降のことであろう³⁾。その理由としてあげられるのは、初期シュルレアリスムにおいて、女性は、恋愛そして崇拜の対象として高く祭り上げられればあげられるほど、受動的な身動きの取れない立場に追いやられ、そこから抜け出せなくなっていったからだと思われる。しかしながら、ここから、主体—客体 (対象)、能動的—受動的、等々の二項対立的構図を持ち出してきて、シュルレアリスムの男性優位主義を批判するだけでは、不十分であろう。ことはもっと複雑であるようだ⁴⁾。

カリストは、この点について、言語学や精神分析でよく使われる修辞学から由来する対概念を援用して、もっと柔軟かつ積極的に女性シュルレアリストたちの立場と活動を説明している。男性のシュルレアリストにとって、女性シュルレアリストたちは「隠喩 (métaphore)」という代理の操作によって、彼女たち自身であることをやめ、別の存在、男性の望む対象へと置き換えられ、作り替えられていく。それが、男性シュルレアリストたちにとっての愛の対象、ミューズ、メリュジーヌ、「子供としての女性 (femme-enfant)」などである。ここで作動させられている理想化、昇華、象徴

化という「隠喩」の性質上、その作られた代理物は、「全体化 (totalisation)」あるいは「ファロサン トリズム」的な傾向を免れない。女性シュルレアリストたちは、一方では、そうした男性の「隠喩」の対象となることを受け入れながらも、もう一方で、自らも創作者あるいは活動家として、もっぱら「換喩 (métonymie)」的な方途を選択していく。こうして、彼女たちの作り出す作品は、自己やその身体を別の存在や物に置き換える隠喩的方法是絶たれているがゆえに、徹底的に自己とその身体に向き合うことになる。あるものは、写真家兼モデルとして身体性を強調し、またあるものは写真や鏡を駆使したセルフポートレートを撮り、またあるものは自伝的な著作を残している。しかしそれらは、ある意味において、通常の在り方をはるかに超えているといえよう。彼女たちは、作品の創作にあって、自己あるいはその身体へ徹底的な刻印や歪曲を加えた「自己一再現・表象 (auto-représentation)」を基本方針としている。それらは、妄想的なアナグラムを駆使した詩や自伝、断片的かつ無限ともいえる分身的なポートレート、また極度な倒錯性とフェティッシュ性を備えたオブジェとして現れてくる⁵⁾。

ところで、本稿で扱うのは、上で述べた、そうしたシュルレアリスムにおける男女の二項対立的な差異の指摘やその批判ではない。「隠喩」や「換喩」という記号学的操作によって、ブルトンとある女性がさまざまな事件や記号によって引き合ったり、排斥したりする磁場、また周囲の人物やオブジェをもその圏域に巻き込んで攪乱していく、そのような磁場の探究である⁶⁾。

ブルトンは『ナジャ』の冒頭で、「私は誰か (Qui suis-je ?)」(O.C.I, p. 645. 『ナジャ』、p.11) という問いを發した。そのすぐ後にブルトンが告白しているように、この問いを想起させることわざ⁷⁾によって、「私」は「私」とは違う別の誰かと「つき合う = つきまとう (hanter)」ことにより、その別の「私」である誰か(つまり、「幽霊」あるいは「分身」と向きあうことになり、同時にその時、ブルトン自身もまたその人物の「幽霊」あるいは「分身」の役を演じなければならない。『ナジャ』の冒頭の一句は、この自己探求につきまとう、二重性や両義性を問題にしているのだが、本稿ではこの有名な問いを出発点として、ブルトンとある女性との関係について考えいく。その女性は、ブルトンの愛の対象であったり、書かれた書物の著者の呼びかけの相手であっただけでなく、書き手自身の自覚や予想をはるかに超えて彼を突き動かし、さらには、一つの書物から別の書物、『ナジャ』から『通底器』、さらにその先へと(あるいは、逆に遡行的に『ナジャ』が書かれる以前へと?) 場所と姿を変えて移動していくことによって、書き手を導いていく、不可思議な通過的媒介の役割を果たしていたようなのだ。周知のように、『ナジャ』ではナジャ、『狂気的愛』ではジャクリヌ・ランバという確固とした中心となる女性がそれぞれにいる。そのあいだに発表された『通底器』では表向きにはそうした女性が不在であるために、かなり曖昧な印象を与える。いや女性はいて、『通底器』全体はその女性についての書物なのであるが、興味深いことに、作中ではその女性の名は伏せられ、Xという記号に置き換えられている。まるで、名前を失った幽霊か分身を語るかのよう。そして、その女性の名前は、シュザンヌ・ミュザールという。

I. シュザンヌ・ミュザールとの「狂気的愛 (l'amour-folie)」⁸⁾

I-1: シュザンヌ・ミュザール (Suzanne MUZARD, 1900–1992) という女性

シュザンヌ・ミュザールは、1900年、パリの東近郊のオーベルヴィリエ (Aubervilliers) の近くで鏡の製造工場で働く平凡な夫婦の間に生まれている。五歳の時に父親が他界する。彼女自身の「未刊の告白の手記 (Les Confidences inachevées)」(以下、「告白の手記」と略記する)によれば、この「小柄で、金髪 (blonde)」の少女は、奇抜な性格の祖父の影響を受けて育ったかなり男勝りの「大胆な性格」⁹⁾であったようだ。その影響を受けた祖父が交通事故で亡くなったことは、彼女にとってかなりの衝撃であり、『通底器』で報告されているブルトンの夢にも反映している。第一次大戦後、初恋の相手と出会い、結婚しようと駆け落ちをするが、男の方の家族に反対される。結局、その男とは別れ、二十歳の時に十五歳年上のロシア人の家族持ちの男性と不倫関係を結ぶ。がこれもまた破綻。その後、彼女は親しい幼友達と一緒にパリへ出て、娼家ラ・シュシェットへ入る¹⁰⁾。その時の最初の客が、20世紀のフランス文学と社会・政治を大きく揺り動かすことになる、作家のエマニュエル・ベルル (Emmanuel BERL, 1892-1976) とドリュ・ラ・ロシェル (DRIEU LA ROCHELLE, 1893-1945) であったことによって、彼女の運命は大きく変わる。ベルルはシュザンヌをすぐさま引き取り、同棲を始める。その時、ベルルにはジャクリーヌという正妻がいたが、シュザンヌとの仲は正妻の公認であった。というより、それは、ジャクリーヌがシュザンヌとの関係を応援していたというこのうえなく奇妙なカップルであった。ベルルは当初、シュザンヌとの結婚は全く念頭になかった。シュザンヌは、正妻が認めるれっきとした愛人だったのである。

これからわれわれは、このシュザンヌを含めたシュルレアリストたちの人間関係、恋愛関係図のいくつかを見ていくわけだが、愛人、不倫、三角関係と複雑で多様な形をとっていくことはもとより、それに対する当人や周囲の人間たちの受け止め方が大きく常識を超えたものであることに驚かされるであろう。

ともあれ、ベルルの愛人になったことにより、シュザンヌは、ある意味では、生まれてからずっと苦しめられていた貧困という経済的困難から抜け出すことができた。それと同時に、パリの文壇へ出入りするという特権も得る。シュザンヌにとっては予想以上の幸運が同時に舞い込んできたといっていいたろうが、経済的困難がこれからシュザンヌ、ブルトン、ベルルの三人の関係を大きく動かしていく要因となることはここで付け加えておきたい。そのシュザンヌがブルトンと出会うのは、1927年10月、シュルレアリストたちの集まるパリのカフェ・シラノであった。二人を会わせしたのは愛人のベルルである。ブルトンとシュザンヌはすぐさま恋に落ちる。

ところで、ブルトンとシュザンヌの会話が自分たちの昔の体験に及んで、二人とも以前にオーベルヴィリエに滞在したことがあることを確認したのは、この最初の出会いの時としている文献もある。確かに二人に共通する過去が初対面の男女の仲をより親しくするというのはよくあるきっかけではあるが、おそらくこのオーベルヴィリエの会話が交わされたのは、最初の出会いの時ではなく、その後のこと、以下で述べる二人の逃避行先のトゥーロンであろう。というのも、この過去

の記憶は、そうした恋人たちを親しくする共有物である以上に重要で徴候的な意味を持っているように思われるからである¹¹⁾。シュザンヌは、「告白の手記」のなかでこう証言している。「わたしは、A. B. が14-18年の戦争の後にオーベルヴィリエに住んでいたことを知った。そこはわたしも、1918年まで一時生活していた場所だった。わたしたちは、この労働者街の、その工場の煙の、その空き地の悲しさにどっぷり浸かっていたのだった。わたしは金髪の三つ編みをした少女でそこを散策していたし、医学生の彼は毎日パリからこの郊外の地へやってきていた¹²⁾」徴候的な意味というのは、二人の最初の出会いから一年後、ブルトンが最初の妻シモーヌ (Simone KAHN, 1897-1980) に宛てた1928年10月8日付の手紙のなかで、シモーヌの無理解をこう詰っているからである。「君 (=シモーヌ) はそれが何であるかをなにも知ることはできないんだ。君はあの通りが何であるのか、オーベルヴィリエの工場が何であるのか、売春というものが何であるのか知らないんだ。ぼくがそれについて何を語ろうとしているのか、君には理解することができないからだ。君は、ひとが自分で作ろうとする未来の姿が、どれだけ過去の姿に依存して作られていくものなのかを考えてみようと思えない。ぼくはこの話題について、あと一言しか付け加えない。シュザンヌはおそらく完全に気が違っているんだ¹³⁾」シュザンヌの告白の文とブルトンの手紙の一節が、まるで口裏を合わせたかのように似ていることに気付かれるであろう。この手紙が書かれた時、ブルトン、シモーヌ、シュザンヌの三人の関係は、かなり悪化しており、手紙の内容の主旨はブルトンのシュザンヌに対する非難である（「シュザンヌはおそらく完全に気が違っている (folle) なんだ」）。しかしながらそうしたなかでも、やはりシュザンヌに対する、愛情がほの見える。この部分でも、シュザンヌとブルトンの二人にしかわからない、二人だけが共有して知っている過去（シュザンヌの貧困と娼婦の身）を持ち出すことによって、シュザンヌへの愛を保持しようとしているように思われる。まるで夢における、過去の幼児記憶が夢の人物たちを結びつけるように。険悪な仲になりながらも、過去という共有財産をもつ分身のようにブルトンとシュザンヌは、結びつけられている。あるいは、ブルトンはそうあることを望んでいる。それが、相手を憎みながらも求める不合理な愛、ブルトンのシュザンヌに対する「狂気の愛 (l'amour-folie)」である。

ともあれ、出会いから一カ月後の11月18日、ブルトンとシュザンヌの二人は、南仏へ逃避行を企てる。リヨン、アヴィニオン、マルセイユと移動を繰り返しながら、二人はトゥーロンへと入りあえず落ち着く。この事件は、スキャンダルとなり、パリの新聞は事件に飛びつき、「シュルレアリスムの法王 (le pape du surréalisme)」が「金髪のシュルレアリスト女性 (une blonde surréaliste)」と逃避行したという記事が書かれている¹⁴⁾。

ところで、この恋愛事件が起きた時、上で述べたように、ブルトンにはシモーヌというれっきとした妻がいた。二人が結婚したのは、1921年であるが、結婚以来、二人の間には、どのようなことでも隠し立てをせず、何でも相談して物事を決めるという約束を取り結んでおり、それが忠実に守られていた。したがって、シュザンヌとブルトンの恋愛逃避行は、一部始終、ブルトンからシモーヌに手紙で報告されており、資金の調達などもされていた（その時、ブルトンのコレクション

のミロの絵が売却されている)。激怒したベルルがブルトンのアパートがあるパリのフォンテーヌ街に現れ、事の説明と二人の居場所を問い詰めに現れた時に、そこにいたのは、同じ裏切られた「同胞」でもなく「悲嘆にくれる妻」でもなかった。シモーヌは毅然とした態度でブルトンとシュザンヌをかばって何も言わなかったという¹⁵⁾。

繰り返しになるが、ブルトンは、この逃避行の間も、シモーヌに手紙を書き続けて、シュザンヌとの様子をシモーヌに逐一報告しているのだが、その手紙には、必ずと言ってよいほど、シュザンヌからシモーヌへ宛てた一言も書き添えられている。ブルトンは、シュザンヌがシモーヌの気に入るよう配慮していたと思われる。というのも、この逃避行の後、ブルトンは、シモーヌとシュザンヌと自分の三角関係を正当化し維持しようと考えていたふしがあるからである。実際、ベルルという愛人がいて、その愛人の経済的援助で生活していたシュザンヌであるが、ブルトンは彼女を自宅のはす向かいのアパートに住まわせて、毎日、出会っていたという。さらには、シュザンヌはシモーヌから夕食に招かれたことに驚いたと告白している¹⁶⁾。

ここまでの男女関係をまとめてみると、すでに、シュザンヌを中心に、三つの男女の三角関係の方程式が形成されていることになる。すなわち、1) シュザンヌ＝ジャクリーヌ＝ベルル、2) シュザンヌ＝ベルル＝ブルトン、3) シュザンヌ＝シモーヌ＝ブルトン、である。そしてここでは、敵対するライバルをお互いのライバル的「分身」、つまり味方としてとして解釈するなら、シュザンヌとジャクリーヌもしくはシモーヌは、ベルルあるいはブルトンを攻撃し(1)と3)のケース)、ベルルとブルトンはシュザンヌを攻撃しているということになる(2)のケース)。いずれのケースでも中心的存在となっているのは、シュザンヌである。

その後、ブルトン、シュザンヌ、シモーヌ、ベルル、この四人の関係はさらに複雑になっていく。

I-2：シュルレアリスムの恋愛術

ところで、ブルトンの恋愛事件はこれが初めてではない。1926年10月4日のナジャとの出会い、彼女との短い付き合いが作品『ナジャ』(初版1928、著者による全面改訂版1963)を生み出したことは、改めていう必要はないであろう。その『ナジャ』のなかに「手袋の貴婦人 (la Dame au gant)」(O.C.I, p.610.『ナジャ』、pp.65-67)と呼ばれるエピソードがあるが、ここに出てくる第二の女性リーズ・ドゥアルム (Lise DEHARME, 1878-1977) との恋愛がからんでくる¹⁷⁾。1924年12月15日、パリのグルネル通りに設置されていた「シュルレアリスム本部」を訪ねてきて、ブロンズでできた手袋のオブジェを置いて行った既婚女性がいた。その女性リーズにひとめぼれしたブルトンは彼女に「狂おしいくらい (à la folie)」熱中したが、後にリーズは、無線電信の発明者ポール・ドゥアルムと再婚することになる。ブルトンは、結局、リーズにいいように翻弄されたわけだが、この恋愛に三年間苦しむことになる。1927年7月25日、この女性に対するブルトンの「狂気の愛 (l'amour-folie)」に耐えられなくなったシモーヌは、結婚以来、初めてフォンテーヌ街のアパートを出ていく¹⁸⁾。リーズについては、これ以上言及しないが、この短くも熱狂的な恋愛が残した痕跡は二つある。一

つは、すでに述べた、妻シモーヌとの関係の悪化である。もう一つは、リーズとの恋愛の痛手から、ブルトンは、この年の夏パリを離れて、ディエップの街の近くの町ヴァランジュヴィル-シュルメールにある「アンゴの館」に単身籠って『ナジャ』を執筆したことである（『ナジャ』のなかでも言及され、館の写真が掲載されている）。この時、アラゴンは愛人のナンシー・キュナーと一緒に近くのプールヴィルの町に滞在して、時々ブルトンとコンタクトを取りながら、猛烈な勢いで『文体論 (Traité du style)』（1928）を書いていた。その時、シモーヌは、タンギー夫妻、マックス・モリーズ、マルセル・ノルと一緒にマンシュでバカンスを過ごしている。

ブルトンとナジャとの関係は、作品に述べられている通りであり、二人の関係は、時期的には、ごく短い出来事である。最初はナジャの不可思議な魅力に惹かれ、彼女を貧窮から救おうと金銭的な援助もしたブルトンであったが（この時にも所蔵の絵を売っている）、次第にナジャの奇妙の言動、そして精神の異常の悪化に耐えられずに、距離を置くようになっていく。最終的にナジャを狂気の闇から救えなかったことに対して、ブルトンはかなり負い目を感じていたようだ（『通底器』の夢のなかでそのことが反映されてでてくる）。ナジャへの種々の援助については、シモーヌもいろいろと協力して奔走している。

ところでそのシモーヌであるが、彼女は以前から、同じシュルレアリストの仲間である、マックス・モリーズ (Max MORISE, 1900-1973) へ恋愛感情を抱いていた¹⁹⁾。ここで、シモーヌ＝ブルトン＝モリーズの新たな恋愛の方程式が付け加わることになる。ともあれ、このシモーヌとマックス・モリーズとの関係であるが、いつからどの程度に親密な関係であったのか、ブルトンがそれを知っていたのか否か、あるいは単なる仲間内のつきあいとして認めていたのかは、実は、よくわかっていないのである。いや、わかっていないというより、当事者や周囲の友人たちの受け止め方がまちまちで、曖昧なのである。

しかしながら、シモーヌの心の内を知る手立てが全くないわけではない。シモーヌには、当時、頻繁に手紙を交わしていた親しい友人ドゥニーズ・レヴィーがいて、ドゥニーズはシモーヌにとっていわば、「打ち明け相手 (la confidente)」のような存在であった。ドゥニーズは後に、元シュルレアリストのピエール・ナヴィール (Pierre NAVILLE, 1904-1993) と結婚し、ナヴィール夫人となる²⁰⁾。シモーヌはドゥニーズそして男性シュルレアリストの何人かと一緒にヴァカンスの旅を繰り返していた。そしてそこには、いつもモリーズの姿がいた。もちろん、『ナジャ』執筆の時もそうであったように、これらの旅行はブルトン公認である。

シモーヌとモリーズとの関係が始まったのは、1923年1月からである。シモーヌがブルトン抜きで、モリーズや他の友人たちとよく旅行に出かけていたこと、そしてシモーヌとモリーズが二人きりで旅行もしていたことは事実である。ブルトンがそれをどこまで知っていて、そのように考えていたのかは意見の分かれるところかもしれない。周囲の友人や知人たちは、二人のかなり親密な関係を知っていた可能性は高い。二人は親しく、たびたび友人たちと一緒に旅行をするが、だがそれだけの友達あるいはシュルレアリスムの同志の仲にとどまっていたとブルトンはとらえていたと

というのが妥当なのかもしれない。というのも、シモーヌとマックス・モリーズとの深い関係を初めて(?) 知ったブルトンは、怒りの手紙をシモーヌに書いているからである²¹⁾。

ブルトンとシモーヌの夫婦関係は、すでに1927年のリーズ・ドゥアルムの存在によってかなり亀裂が入っていたのだから、その後にナジャ、そしてシュザンヌが現れて二人の関係が悪化していったのは当然としても、特にシュザンヌとのごたごたで夫婦関係が完全に破綻するまでは、シモーヌのブルトンに対する愛情が冷めていたというのではなさそうなのである。シュザンヌは好きになれないし、そして彼女とブルトンとの恋愛は賛成できないし、ましてや三人の生活などまっぴらごめんであったろうが、シモーヌのブルトンに対する愛情は変わらなかったようだ。

シモーヌのブルトンに対する愛情と、モリーズに対する愛情は、そもそも種類の別な愛情であったのである。シモーヌは相談役のドゥニーズに述べている。モリーズに対する愛は、女性としての愛であったことはほぼ確かである。問題は、ブルトンに対する愛であるが、シモーヌは、手紙でこう述べている。「アンドレ——わたしには、彼のためだけに生きること以外になにができたでしょう？ わたしは時々、わたしが他の人たちを愛することがあったとしても、それはやっぱり、彼のためにそうしているのだと考えるのよ。彼は本質的な存在。彼だけが私の生を活発にしてくれる。でも、彼は暗い時期のなかにもいるのよ²²⁾」どうやら、ブルトンは、シモーヌにとっては、自分を守ってくれる保護者であり崇拜の対象であると同時に、自分を超えた絶対的な存在で、ブルトンがいなければ自分自身がありえない、そんな愛の対象だったようだ。カリスマ的存在といったところであろうか。

II. 『ナジャ』(1928) のなかのシュザンヌ

II-1: 夜明け=オーブ

話しがだいぶ先走ってしまったが、ブルトンとシュザンヌの出会いへ話を戻そう。

バルルとの関係を振り切って、南仏へ逃避行したブルトンとシュザンヌであったのだが、帰途、アヴィニオンに寄り、冬の土砂降りの雨を避けるために、法王庁の近くのレストラン「夜明けのもと(Sous les Aubes)」に入る。そこで食事をしていた時、先に述べた二人の過去の出会いの話しをし、そして『ナジャ』のなかで紹介されている、自分の名前も覚えきれないほど忘れっぽい紳士ドゥルイ氏の笑い話が話題にされていたのだが、最後には二人は口論となり、喧嘩してしまう²³⁾。その時に撮られたレストランの看板の写真の一部が『ナジャ』に再現されている。「夜明け(les Aubes)」は、冬の寒さと雨に苦しめられる二人にとって、太陽の出現による光と暖かさの恵みだけでなく、二人の仲の修復の期待を意味しているであろう。そしてまた、「太陽=金色=髪の色」という連想から、当然、ブルトンの念頭にはシュザンヌの存在があったのは疑いが無い。作品『ナジャ』では、シュザンヌは名前を伏せられ、Xとして呼びかけの対象として登場する。もちろんこの場面に対応する『ナジャ』のなかでも、ブルトンはシュザンヌにこう呼びかけている。

君は、ここに私の語ってきたすべてのなかから、あの「夜明け (LES AUBES)」にむかってあげられた君の手の上の、わずかな雨の雫をしか受けとっていないだろう。(……) 君は、私に耳を傾けるすべての人にとって、本質などではなく、ひとりの女であるはずだ。君は、以前もいまもキマイラのような幻獣だと思わせてしまう何か君のなかにどれだけあったとしても、ひとりの女以外のなにものでもない。(……) 君は、もちろん、理想的に美しい。君は、すべてが黎明 (point du jour) へとつれもどす存在、だからこそ、私はもう二度ときみに会えないかもしれない…… (O.C.I, p.751.『ナジャ』、pp.184-185)

ここにあるのは、二人に降り注がれたアヴィニョンの雨の記憶の断片。そして周囲の人間たちを翻弄し、夫婦を離別させてしまうような、幻獣のような悪女。だが、ブルトンにとっては、それでもシュザンヌは、やはり「ひとりの女」なのである。そして、二人の別離の予感も示唆されている。

そして、「オーブ」はまた、ブルトンの二番目の妻ジャクリーヌ・ランバ (Jacqueline LAMBA, 1910-1988) との間にできた娘の名でもある。ここで娘オーブに関して一つ、突拍子もない思い付きのように思われるが、根拠がなくもない一つのエピソードがある。シュルレアリスム・グループは1928年1月から1932年8月にかけて、性に関するさまざまなテーマについて討論を繰り返していた。1928年2月15日におこなわれた第4回のセッションでは、たまたま話題が「子供」のことに及んだ。子供を持つことについてどう思うかという質問に、ほとんどすべてのシュルレアリストたちが否定的意見を表明しているが (ジャック・プレヴェールなどは「即刻殺すべきだ」などと過激な挑発的言動を吐いている)、その中で同様に否定的意見に与しているブルトンはこう述べている。

ぼくの生誕とともに始まった悲しい冗談は、ぼくの死とともに終わるべきだ。とはいえ、将来意見を変える権利は保留しておくよ。何しろ情熱的な恋愛の場合には、すべての事柄について無分別になってしまうものだし、ぼくの見解より女性の意見のほうが優先するかもしれないからね。 (下線強調引用者)²⁴⁾

ここには父親に対するブルトンの憎しみの感情の発露が見られるが、それはここでは問わないとして、注目すべきは、下線部分で子供を持つことに対し全面的否定ではなく留保をつけていることである。1928年2月には、ブルトンはまだジャクリーヌに出会っていないのであるから、ここで言及されている「女性」とはシュザンヌを指していることになり、もしシュザンヌが望んだら、二人のあいだには子供がもうけられていたかもしれない。ブルトンの娘オーブは、ブルトンとシュザンヌの娘であったかもしれないのである！

セバックも述べているように²⁵⁾、この子供の話は、愛人であったベルルがシュザンヌをブルトンから取り戻そうとして打って出た最後の切り札でもあった。1928年9月15日、ベルルはシュザンヌに対して家庭を築き、子供を持つという手紙を送っている。幼い時に早くから父親を亡くし、一時は娼婦にまでなったシュザンヌにしてみれば、普通の家庭を築き、自分の子供を持つということにかなり執着心があったであろう。この手紙は、決定的な効果を上げ、シュザンヌはベルルの元

に戻り、結局、ベルルと結婚している。セバックが述べるところによれば、シュザンヌはこのベルルの手紙を破棄することなく、晩年までずっと保管していたという。上で論じた「性に関する探究」の第4回目のセッションの実践と日にちとは前後するが、子供の話について以前から、シュザンヌがブルトンにほのめかしていたという可能性はある。いずれにせよ、この出来事のなかには、シュザンヌが持ちたいと思っていた子供、ブルトンとシュザンヌのこじれた仲を回復する契機ともなりえたレストランの名称「夜明け＝オーブ」(作品『ナジャ』の末尾に書かれ、シュザンヌも読んで知っている)、そして後年ブルトンがもうける子供の命名、とブルトンとシュザンヌの願望に深く根差している記号化された情念の連鎖のようなものを感じざるを得ない。

II-2：「痙攣する美」

1927年12月25日、結婚する以前の話に戻ると、ベルルとよりを戻したシュザンヌは、彼と一緒にチュニジアの旅へでかけている。その出発場所が、パリのリヨン駅であり、『ナジャ』の結語として出てくる有名な「痙攣的な美 (la beauté convulsive)」の舞台である。この出発については、汽車に乗って出発しようとするシュザンヌとベルルを阻止しようと、ブルトンはシュルレアリストの仲間とともにリヨン駅へ駆けつけるのであるが、結局二人は、そのまま出発してしまう。この時の出来事が、「動的でもなければ静的でもない美」(O.C.I, p.753.『ナジャ』、p.189) となって結晶し、この美は、相対する二つの動き、性質をもったものとして、ブルトンによってさまざまなものに変貌させられていくのであるが、そのなかに、ひとつだけ具体的な場所と姿をもったものが紛れ込んでいるのが目立つ。それが、リヨン駅でシュザンヌとベルルが乗る汽車である。『ナジャ』にはこうある。

美は、リヨン駅でたえず身はずませている汽車のようなものだ。それはけっして発車しようとはせず、これまでにも発車したことがなかったと私にわかる。(O.C. I, p.753.『ナジャ』、p.189)

ここでは、汽車は発車しないがごとく書かれているが、実際には、シュザンヌとベルルを運び去ってしまう。「発車しようとはせず、これまでにも発車したことがなかった」汽車は、ブルトンの心のなかにしか存在しないのである。

「痙攣する美」については、ブルトンは再びこのテーマを取り上げ、さらにそれを展開させ、1934年、雑誌『ミノトール (Minotaure)』に「美とは痙攣的なものであろう」と題されたテキストを発表する(このテキストがさらに、『狂気の愛』の第一部になる)。ブルトンはそこで「このテキストの補足説明として、何年ものあいだ熱帯の原生林の錯乱に放置されているとでもいった、堂々とした機関車の写真を提供できなかったことを残念に思う」(O.C.II, p. 680.『狂気の愛』、p.22) と述べている。実際、雑誌発表の「美とは痙攣的なものであろう」にも、『狂気の愛』にもこの写真は掲載されていない。だが、この機関車の写真は、なぜかブルトンのテキストではなく、バンジャマン・

ペレ (Benjamin PÉRET, 1899–1959) が1937年冬号の『ミノートル』に発表したテキスト「自然は進歩を食いつくし、さらにこれを乗り越える」に添えて発表されているのである²⁶⁾。そこに見られるのは、『ナジャ』でブルトンが書いたような、「身はずませている」痙攣的な汽車とはほど遠く、原始林のような森のなかで木の枝あるいは蔦に全身をからまれ、死んだように静かにその巨体を横たえている古びた機関車の姿である。1937年時点のブルトンのシュザンヌに対する失われた愛情のイメージであろうか。それともブルトンの心のうちに隠されたままになっている愛情の痕跡を表しているのであろうか。

ともあれ、またリヨン駅へ話しを戻すと、シュザンヌはベルルとブルトンの間をめまぐるしいほど行ったり来たりして、二人や周囲の人々を困惑させている。1928年、ベルルとともにリヨン駅からコルシカ島へ出発したシュザンヌであったが、その旅から帰った直後、シュザンヌはパリのブルトンの元に戻っている。この時シュザンヌは、精神的にかなり不安定な状態にあり、高熱で苦しみ、医者に診察をしてもらい「脳炎」の疑いありとされている²⁷⁾。この極度に悪化した状態に悩んだブルトンは、シモーヌと離婚を決意し、シモーヌはフォンテーヌ街を決定的に離れることになる。だが、同年、12月1日、すでに言及したように、シュザンヌはベルルと結婚している。この結婚には、家庭を築き、子供を持ちたいというベルルの手紙によるプロポーズが大きく働いていたことはすでに述べた。しかし、年が明けた1929年1月、シュザンヌは再びブルトンの元に戻り、二人でフォンテーヌ街のブルトン宅に居を構えている。かと思うと、5月になると、シュザンヌはまた、バスク地方に滞在していたベルルのもとに合流しに行ったために、ブルトンが連れ戻しに出かけている。その帰途に、タンギー夫妻、ピエール・ユニク (Pierre UNIK, 1909–1945)、ジョルジュ・サドール (Georges SADOUL, 1904–1967) と一緒に寄ったのが「サン島 (l'île de Sein)」であった。この島については『通底器』で言及されているように、これ以降、ブルトンにとって特権的な場所の一つとなる²⁸⁾。さらに、パリに戻った後、さまざまな事件が起こり、二人の関係もだんだん険悪になって修復がきかないものになっていく。例えば、ブルトンは離婚訴訟の手続きのために、フォンテーヌ街の自宅を封鎖され、エリュアールの住むホテルに転がり込むことになるというハプニングも起きている。『シュルレアリスム第二宣言』発表の後、1930年、シュルレアリスム運動を離脱したメンバーたちによる、ブルトンを攻撃するパンフレット『死骸』が書かれる。弔電が届いたり、夜中にひっきりなしにかかってくる無言電話など、私生活面でも苦勞と不安が絶えなかった。そんななか、1930年7月、このような生活に耐えきれなくなったシュザンヌがブルトンのもとを去っていく。今度は決定的に。二人の愛の最終的な終わりである。

妻、仲間や友人たち、そして愛するシュザンヌを失い、文字通り孤独になったブルトンの意気消沈ぶりは激しく、精神錯乱状態に近い状態になり、一時は、自殺も考えたほどであるという²⁹⁾。

以上が、作品『通底器』に描かれることになる、ブルトンの人生で最悪の生活と精神状態である。

Ⅲ. 『通底器』のなかのシュザンヌ

Ⅲ-1：ひまわり一杯のビデ

『通底器』の第一部でブルトンが披露している夢の問題については、すでに論じたことがある。1931年8月26日に見たブルトンの夢とその記述は、フロイトが『夢解釈』で展開した夢理論に対するブルトンなりの批判的返答であったが、それ以上に、すでに現実世界で失ったシュザンヌへの決定的な決別の儀式のようなものであった。この夢を見ることにより、夢の作用によって、ブルトンは、心の中でシュザンヌへの愛情を断ち切り、次の一歩へと進むことができたのである。第一部の夢とその解釈の詳細については、拙論を見てもらうとして³⁰⁾、ここでは、その夢だけではなく、『通底器』の第一部と第二部のテキストへと検討対象を広げて問題を取り上げて考察してきたい。

まずは、基本的なことを確認していく。

第一部では、ブルトン自身の二つの夢が報告され、フロイトの『夢解釈』での夢の分析にならって、あるいはそれ以上の詳細かつ徹底さをもってブルトンの夢が自己分析されていた。二つのうちで中心となるのは、1931年8月26日の朝に見て、記録された夢である。その夢の素材ともいえる主要な人物がナジャとシュザンヌであった。この夢自体が二つの夢によって構成されていて（いわゆる<前奏夢（前夢）>と<主要夢（主夢）>である）、ざっとそのストーリーを紹介すると以下のようなものである。夢を、しかも他人の夢の、そのストーリーなるものを紹介するということがすでに、夢に二重三重の変形を加えることにもつながりかねないが、ここでは、以下の論の展開に必要最低限の情報だけにとどめておく。ちなみにこの夢には、同じシュルレアリストのジョルジュ・サドゥールが出てくる。

まず夢は、ナジャと思しき老女がX（シュザンヌ）に危害を加えようとして、彼女を追跡している場面から始まる。Xはこの狂女から逃げようとするのだが、Xは道を横切るということに恐怖を感じていて、どんな近いところでもタクシーを利用するのだった。「彼女はとても警戒していて、通りには一歩も出なかったものだ。私は手もとに残っていた金を全部彼女に渡して、家賃を払ってくれるようにと頼んだ。なぜなら、彼女はもうこれっきり戻ってこない筈だから。たぶん、われわれがこれまでにない深刻な言い争いをしたために、こんなことになったのだ。」(O.C.II, p.119. 『通底器』、p.32) ここで夢は、この逃走劇から、ブルトンの両親の家での夕食時の場面、「白いテーブルクロスのかかったかなり大きな四角いテーブル」(Ibid., 『通底器』、p.33)の場面が変わる。父親から付き合っている女性のことと叱責を受けたブルトンは、父親の叱責の言葉「自分はXを知らないのだから、彼女がその老女「より良いか、あるいは良くないか」ということは自分にはわからない」(Ibid., 『通底器』、pp.33-34)という屁理屈を聞かされてうんざりして、「二十歳の女と六十五歳の女（この二つの数は夢の中で特に強調されている）とをどうして比べたりすることができるか」(Ibid., 『通底器』、p.34)と反論する。その後ブルトンの考えは、またXのことに戻っていき、彼女はもう戻らないことを痛感する。

ここまでが、前奏夢（前夢）で、次に以下のように続く。

主要夢（主夢）は、ある店のなかで十二歳くらいの少年にネクタイの購入を薦められている場面に変わる。店のもう一人の中年の店員が、「吸血鬼ノスフェラトゥのネクタイ」をブルトンに提示する。その暗緑色のネクタイは、見る角度によって、そこにフランスの地図、東部国境の地図が浮かび上がってくる仕掛けになっていて、同時にその東部国境はノスフェラトゥの横顔を映し出すという不思議なものだった。

ブルトンの夢はまだ続くのであるが、以下は省略して、ここまで紹介したいいくつかの箇所について考えてみたい。

夢のなかにナジャ、そしてシュザンヌが出てくるのは、この時期としては当然であり、上の要約で引用した部分は、現実の出来事をほぼそのまま反映しているように思われる。ナジャがXに危害を加えようとしているというのは事実に反し、これはブルトンのナジャに対する負い目——金銭的援助ができなかったこと、精神の闇に飲み込まれるのを防げなかったこと、そして彼女の後にシュザンヌという恋人ができたこと——の表れであるとして、まずは、Xすなわちシュザンヌが通りを横切ることをひどく恐れていたことは、これが事実であることはすでに述べた。大好きだったシュザンヌの祖父が交通事故で死んだことの恐怖心とトラウマである³¹⁾。その直後の、家賃に関する箇所もまた、当時の二人の暮らしぶりがそのまま持ち込まれているようだ。シモーヌとの離婚手続きが続いている間、ブルトンはフォンテーヌ街を封鎖されて自宅に住むことができず、エリュアールと同じホテルにシュザンヌと住んでいたが、彼女に渡した「家賃」はホテルの部屋代であろうし、またパンフレット『死骸』事件でさんざ悩まされたあげく、このホテルの部屋で二人は決定的に別れることになる。つまり、この夢の前半は、シュザンヌとの関係の決裂がほぼそのままに夢のなかで反復されているものと読むことができる。

次に、前半部分のもう一つの場面と引用、父親とのいさかいの場面であるが、これに関しては、以下のエピソードを想起させられる。1928年末、シュザンヌとブルトンとの関係について悩んでいたシモーヌは、もはや自分の力の限界を悟り、万策尽き果て、親しい友人のドゥニーズとピエール・ナヴィールに相談をもちかけ、なんらかの対策を講じて欲しいと依頼している。その時、ブルトンを説得する役を買ったのがナヴィールであったらしい。1928年10月8日のシモーヌに宛てた手紙には、以下の文章がある。

ナヴィールはぼくにシュザンヌのことを話したのだが、それを聞いていてぼくは、ヴァレリーがぼくの父親に対し、ぼくがなぜもう医学の勉強をやりたくないかを説明しようと躍起になっていたことを思い出した。その結果は、もちろん、望みなし！³²⁾

ブルトンが医学を修めることを望んだ、あるいは強制したのは父親であり、ブルトンは途中までその命令に従うが、その後文学へ進路を変え、医学を放棄する。その時、ブルトンの文学的才能を認め援助したのがヴァレリーであり、医学生であったブルトンと高名な詩人の間には師弟関係が結ば

れていた。ヴァレリーはいわば文学上の父親に等しいともいえる存在であった。しかし、やがてブルトンはそのヴァレリーと決別して、シュルレアリスム活動に本格的に乗り出していったことは有名な話である。また、ブルトンは、実際に、Xとの関係を両親に報告したところ、夢で使われたのと同じような言葉で父親から叱責を受け、非常に憤慨したと夢の分析の箇所述べている。とすると、不思議なのはそこにヴァレリーが介入していることである。しかも、以前は、ブルトンが医学を捨てて文学の道へ入ろうとしたときに、父親を説得してくれたのはヴァレリーであり、ヴァレリーはその意味では、ブルトンの恩人だったのだから。もっとも父親に対する説得はうまくいかなかったようだが。しかもその後、文学の方向性の違いからブルトンは文学上の父親に反抗して絶縁する。だから、ブルトンの連想あるいは夢のなかでは、父親、ヴァレリー、ナヴィールの三人の姿は一つに圧縮（縮合）させられている。この三人の父親的存在は、ブルトンの行こうとする方向——医学を放棄しての文学への参入の決意、師とは異なる文学活動、そしてシュザンヌへの愛を維持すること——に対して、その進行を妨げようとする共通点を持っている。夢はこの三人に対して、なんらかの復讐をしようとしたものと思われる。ちなみに、ナヴィールは1929年の『シュルレアリスム第二宣言』で破門されたシュルレアリストのうちの一人である。

それよりもっと重要なのは、以下の点である。夢のなかで父親との言い争いのなかで出てくる年齢の「二十歳」の背後には、シュザンヌが決して忘れることのできない出来事があったのだという。ブルトンがシュザンヌから聞かされた話である。二十歳の誕生日の時に、彼女は好意を寄せていた男性からプレゼントを受け取った。感激に打ち震えてそのプレゼントを開けた彼女が見たのは、なんと、「《太陽》（ひまわり）の一杯つまったビデ」(O.C.II, p.125, 『通底器』, p.44) だった³³⁾。夢はここでいったん途切れて、主要夢（主夢）へ入っていくのだが、ブルトンによれば、ここで夢の場面転換をする働きをしているのが、このビデの《太陽》なのだという。夢の後半部分には、「ノスフェラトゥのネクタイ」とフランスの東部国境が出てくるが、これについては、後述する。ともあれ、この後もブルトンの自己分析は続いて、ブルトンはこういつている。この夢は、自分が感じている「きわめて切迫した、実際の不安感」(O.C.II, p.127, 『通底器』, p.46) を取り除こうとしているのだと。そしてその不安感というのは恋愛のモラルに関連していて、ただひとりの女性に捧げられるべき愛（ここでは、シュザンヌに対する愛をもちろん指している）、その愛が何らかの理由で他の女性へ移っていったとしても、「ただ一人の存在のための愛 (l'amour limité à un seul être)」(Ibid., 『通底器』, p.47) というモラル、それを信じている自分の信念と価値は保たれるのかという問題である。夢はそれに《oui》と答える。それがこの夢の効能であると同時に、『通底器』第二部のテキストの存在理由であろう。

しかしながら、それ以上に、ここでわれわれの関心を惹くのは、シュザンヌの髪の色に関わるイメージの結合「太陽＝金髪」である。というのも、夢には出てこないが、自己分析では、ブルトンが当時滞在していたホテルの近くに「太陽の橋、十二キロ (Pont-de-soleil, 12 km)」(Ibid., 『通底器』, 同上) という標識があって、それが夢の後半で重要な意味を持つてくる「橋」につながってくるか

らである。「橋」は、別世界へ通じる通路であり、過去の遺物や亡霊がそこを通過してこちら側へやってくるとともに、逆に、橋を渡って今までとは違う新しい世界や可能性へと進むこともできる両面的な空間である。もうひとつある。ブルトンとサドゥールが滞在していたホテルの食堂で、二人は読み書きをしている美しいドイツ人女性と出会っている。ブルトンは、この女性とまた再会し、彼女と知り合いになりたい強い欲求を覚えたと言っている。この女性についても、また、後述する。

ここまでのことをまとめてみると、この夢の目的は、シュザンヌの不在の苦悩から癒されたいというブルトンの願いをかなえることにあることは間違いない。しかしながら、それ以上に興味深いのは、この夢の内部で、あるいは夢を超えてその外部にまで至る、ブルトンが執着してやまない一連の色（金色）のイメージの連鎖があるということである。夢のなかにしろ、現実世界にしろ、「金髪」、「太陽」、「黎明」、「ひまわり」とイメージは、連なり合い広がりを増していく。この一連のイメージにブルトンは、文字通り、「とり憑かれて」いたのである。娘の名前オーブにしろ、詩「ひまわり」と二番目の妻ジャクリーヌとの出会いにしろ、「太陽」、「黎明」、「ブロンド」、「ひまわり」を抜きにして語ることはできない。そこで何よりも忘れてはいけないことは、これらの色、光、花は、一度はシュザンヌというひとりの女性の身体に触れ、その存在を通過しているという物理的共通点である（そういえば、アヴィニオンで雨に濡れた二人を温めたのは太陽の光であった）。

Ⅲ-2：現実のなかのシュザンヌ

『通底器』の第二部は、うって変わって、ブルトンが現実のパリを彷徨する記録となっている。シュザンヌという愛の対象を失って失意の極みにあったブルトンは、茫然自失の状態でも目的もなくパリの街を彷徨する。いや、目的はあるのだが、その目的は、ブルトンの手の届かないほど遠いところにあるのである。

ここで本題に入る前に、二つのことを確認しておこう。

一つは、自身も認めるように、ブルトンはこの時期、「理性の均衡がほとんど欠けた」(O.C.II, p.168, 『通底器』, p.115, 「無秩序状態」(O.C.II, p.151, 『通底器』, p.86) で毎日を過ごしていたことである。つまり、ブルトンは目覚めながら夢のなかにいるような生活を送っていたのである³⁴⁾。したがって、『通底器』第二部を読むわれわれが、そこに見出すのは、非常に曖昧模糊としたブルトンの生活記録である。

もう一つの事実。そうした状況にあったブルトンは、パリの街を彷徨していたのは、失われたシュザンヌの代理を見だそうという目論見があったからだと言っている。「姿を消してしまった外的対象の代りに、その対象が残していった空白を或る程度まで埋めてくれるような別な対象をもってくるといふ、莫迦げてはいるが、しかしきわめて直接的な誘惑。この誘惑が、或るときには激しく心の中に満ち、私に行動を開始するやうにと迫るのだった」(O.C.II, p.151, 『通底器』, p.86) だからこの時期、この誘惑に駆られて、ブルトンは、普段の謹厳実直な性格にも似合わず、街で見かけた魅力的な女性に手あたり次第声をかけている。といっても、それは誰でもいいというわけで

はなく、そこにはある基準があった。「眼」の魅力である。第二部には、何人かの女性が登場するが、すべてのケースにおいて、ブルトンは最初に女性の「眼」に惹かれているのである³⁵⁾。

最初に出会って惹かれる女性は、1935年4月5日の昼ごろ、パリのブランシュ広場でエリュアールに前の晩の自分の夢を語り終えた後、とある。ここで言及されている夢は、『通底器』第一部で報告されている二つある夢の二番目の夢のことである。その女性は夫と一緒に観光旅行に来ているドイツ人女性である。つまり、この女性は夢のなかで見たフランスの東国境の国から来た女性である。身なりは質素だが、「非のうちどころのない脚、ひざのだいぶ上で組むことでかなり意識的に露出されている脚は、その年はじめて見られた太陽の蒼白い光——いちばん美しい太陽の光——の中で大きく、小さく、そしてさらに大きく揺られていた。その眼は(……) なんて言ったらわかってもらえるだろうか、けっしてもう一度会うことのできない (qu'on ne revoit jamais) 人々がもっているあの眼なのだ」(O.C.II, p.148、『通底器』、p.80) このテキストでは、「眼」が「太陽」と結びついていて、それが「大きく、小さく、そしてさらに大きく揺」れている、まるで、花の「ひまわり」のように³⁶⁾。そして、最後の言葉にあるように、この女性とは、その後カフェで二・三度会ったまま(ブルトンは彼女と近づきになるために、口説き文句を書いたドイツ語のカードを用意していたにもかかわらず)、話を交わすこともなく、通りすがりの女性として、二度と会うことなく別れてしまう。そして、一緒にいた夫の方にも触れておくと、この夫はかなりひどい描かれようである。「連れの男は身じろぎひとつせず、むっつりおし黙って、明らかに彼女とは全然別のことを考えているようだったが——年はたぶん四十くらい——、意気阻喪したというよりは命の火が消え果てたという印象を与え、しかも何かひどく人の心を動かす様子をしていて。いまでも彼の姿はありありと私の目に浮ぶ。やつれ、頭の毛も禿げ、背は猫背、相当に貧しい感じで、まさに人生放棄という姿だった」(O.C.II, pp.147-148、『通底器』、p.80)。妻の魅力、明るい活発さとは、正反対である。

ともあれ、パリの街でのこの女性との出会いの失敗は、ブルトンをこう嘆かせる。

いやはや、何という物語だ、こんなに呆気なく終わってしまうなんて！登場人物は出てくるや否や退場となり、また別の人物が現れる。——が、そもそも、これが別の人物だと誰が知ろう？それならば、わざわざ苦労してこんな話をするのが何になるのか？けれども著者は、彼の人生における何ごとかを伝えようとしているように見え、まるで夢の中でのように語っているのだ——まるで夢の中でのように。(O.C.II, p.155、『通底器』、p.93)

それからブルトンの女性探究は、これ以後、「ギュスターヴ・モローの小さな水彩画の『デリラ』の眼」(O.C.II, p.155、『通底器』、p.94)をした十六歳の少女、そしてランボーの詩「母音 (Voyelles)」にでてくる「O、オメガ、あの人の眼の紫色の光」、十三歳か十四歳の時に街角で客引きをしているのを見た娼婦の「紫色の眼」と次々と移っていくのだが、この女性の追跡行そのものが、夢のなかにおける置換の操作そのものとさほど違いがないことは、上の引用からもブルトン自身、十分

承知していたことがわかる。そしてまた、それらの女性たちが、その出発点の人物であるシュザンヌの代理である限り、この「太陽」と「眼」を共通項とした置換の連鎖は果てしなく続いて終わることがないし、ましてやシュザンヌが戻ってくることもない。ブルトン自身、この多くの女性への接近を次のように述べている。「一人の愛した女性が姿を消した後に残していった魅力、人生そのものに他ならぬその**全魅力**を、女性一般なる集合的人格によって断ち切ることは他の何ものにもまして不可能だと思われる。」(O.C.II. p.152、『通底器』、p.88)

ところで、ここで注目すべきことがある。第二部の冒頭に出てくるドイツ人女性、くたびれてさえない悪意のある夫がいるこのカップルは、若干形を変えて、すでに第一部の夢のなかにでてきているのである。しかも場所と形態を変えて、あるいは別なカップルとして、二度も登場している。まずは、夢のなかに出てきた、両親の家にある「白いテーブル・クロスのかかったかなり大きな四角いテーブル」(O.C.II, p.119、『通底器』、p.33)の箇所で、これについて分析をしたブルトンは自分が滞在していたホテルで出会った、ドイツ語の本を読んでいる女性であると解説していた。この女性はダム工事に従事していた夫についてきていて、ブルトンは女性と知り合いになり話しをしたいと思いますと思っていたが、その前に二人は去ってしまっていた。もう一組のカップルは、ノスフェラトゥのネクタイのくだりでてくるのだが、こちらのほうでは夫が直接登場していて、かなり悪意を込めて描かれている(O.C.II, pp.129-130、『通底器』、pp.49-50)。女性はリーズ・ドゥアルムに似て魅力的であるが、教師と思われるその夫の一番の特徴は、存在感に欠けて影が薄く、今にも消え入りそうだということである。この特徴から、この夫は太陽の光を浴びて消滅していくノスフェラトゥ、そして頭の毛の薄さから「きりん」と同一視されている。このように、夢では二組のカップルであったドイツ人夫婦は、現実のなかでは(!)一組のカップルへと合成・圧縮されているのである。

第二部冒頭のドイツ人夫婦は、現実に出会った人物であるから、夢のカップルのそのままの再生ではない。もちろん、夢で見た二組の夫婦は、後日の4月5日に同じようなカップルに出会うという予言でもないことは言うまでもない。とすると、ただ一つ可能な解釈は、このカップルは結婚したシュザンヌとベルルであり、ドイツ人女性はシュザンヌの代理であり、その夫はエマニュエル・ベルルが投影されたものであろうということになる。夢のなか(実際には、夢の分析だが)では、魅惑的な女性の隣にいて邪魔で目障りな夫、現実の出会いでは、ドイツ人女性にぴったりとくっついて、悪意を持ってこちらを見ている印象の良くない夫、そうした罵詈を書きことによって、ブルトンは、二人の結婚、そしてとりわけベルルに復讐を遂げているのではないだろうか。ついでにいうなら、夢のなかでは、偽シュザンヌと恋人であったサドゥールが登場している。こうして、このドイツ人カップルを基点として、ブルトンとシュザンヌ、それにかかわる人物たちは、夢と現実というトポスにおいて、本物と偽物のカップルとして、まるで合わせ鏡に映った映像でもあるかのよう無限に増幅されていくのである。

そしてまた、このドイツ人夫婦には、もう一つの異文(ヴァリエント)がある。二つは上で述べたものであるが、三つめは、新聞というメディアに掲載されたカリカチュアのデッサンがそれにあ

たる。

ブルトンは理髪店で偶然、新聞『笑い』を手に取り、そこに載っているデッサンを見て非常に驚く。そのあまりの傑作ぶりに、ブルトンは同じ新聞を買うために思わず外へ飛び出したという。それは以下のようなデッサンであった。

部屋があり、ベッドの中には並外れたブロンドの可愛い女がいる。眼は皿のように大きく、おそらく朝の光のせいでまるで飛び出しているように見える。その女は、飾り紐のついた部屋着をきている鷺鼻の男、禿げあがった浅黒い男の方を向いている。彼は今しも、コーヒー片手に部屋に入ってくるところだ。題は「間抜け面 (Tête de linotte)」。絵の下にはこう書いてある。

——かわいい女房にベッドで飲むコーヒー (café au lit) を持っていくのは誰でしょう？

——彼女の寝取られ夫 (cocu) です。(O.C.II, pp.168-169、『通底器』、pp.115-116)

ブルトンは、この挿絵を見て、「自分の記憶をいくら辿ってみても、言い違い (lapsus) に関して、これほど見事な決定版は見あたらなかった」(O.C.II, p.169、『通底器』、p.116) とコメントしているが、確かに、「ベッドで飲むコーヒー (café au lit)」と「カフェ・オ・レ (café au lait)」の絶妙な語呂合わせときわどい冗談は認めるとしても、ブルトンのように、同じ号を買いに外へ飛び出していくほどそれが「素晴らしい (prodigieux)」(O.C.II, p.169、『通底器』、p.116) 言い違いかどうかは疑わしい。むしろ、ブルトンがこのデッサンを見て素晴らしいと思ったのは、デッサンのなかで生じている言葉の間違いではなく、デッサンのモチーフにあったのではないだろうか。実際、このテキストに注を付けているマルグリット・ボネは、『笑い』(1931年8月18日、637号)で描かれているこの二人のカップルは、シュザンヌとベルルの夫婦を表していると指摘している³⁷⁾。確かに、「この上ないブロンド」の女性はシュザンヌに似ているし、それ以上に、そのわきにいる「飾り紐のついた部屋着をきている鷺鼻の男、禿げあがった浅黒い男」はベルル以外の何ものでもない。さらには、このデッサンの男の外貌と服装は(禿頭、鷺鼻、飾りひものついた部屋着)、夢のなかに出てくるノスフェラトゥ、そして『通底器』に挿入されている映画のノスフェラトゥの写真の特徴とぴったりと符合しているのである。太陽の光をあびて、消えていこうとするショットである³⁸⁾。夢のなかのカップルと新聞のカップルには、ノスフェラトゥ＝ベルルが登場してくるのである。

このようにして、ブルトンは、夢の内部と外部で、自分を裏切ったシュザンヌ、そしてとりわけベルルに対して、復讐を遂げていくのである。しかし、見方を変えるなら、自分の愛人であったシュザンヌは、ベルルに奪われたのであるから、ブルトンもまたある意味では「寝取られ夫＝コキュ」である。「コキュ」という共通点において、ブルトンとベルルはお互いに分身の関係にあるといえるだろう。

しかしながら、ベルルに対しては敵意を抱いているにしても、シュザンヌにたいするブルトンの感情はそれほど単純ではないだろ。そもそもこの『通底器』自体が、いなくなったシュザンヌの代

理を求め、その不在を埋める試みの記録媒体であるのだから、シュザンヌに対するブルトンの感情は、愛憎相半ばする、両価的なものであろう。

この観点から見ていくと、パリの女性の追跡行において、ブルトンがすれ違っては消えていった女性たちの、その存在感の重要性がひとときわ際立ってくるように思われる。ブルトンは彼女たちについて、まずは、シュザンヌの魅力（存在）を断ち切る、力のない集合的女性一般というように否定的に語っていたのだった。もう一度、該当箇所を引用する。

一人の愛した女性が姿を消した後に残していった魅力、人生そのものに他ならぬその**全魅力**を、女性一般なる集合的人格によって断ち切ることは他の何ものにもまして不可能だと思われる。**女性一般なる集合的人格**は、たとえば大きな街を一人でしばらくぶらついているあいだに形づくられる。(O.C.II, p.152、『通底器』、p.88)

この後は、こう続く。

ブロンドの髪は茶色の髪を異様にひきたて、逆に茶色の髪はブロンドをきわだたせる。きわめて美しい毛皮の数々はたがいに引き立て合い、それとともに貧しい身なりをも引き立てる。(……) 通りすぎてゆくあの女性 (Cette femme qui passe)、彼女はいったいどこに行くのだろう？何を夢見ているのだろう？何だといってあんなにコケットだったり、あんなに控え目だったりするのだろうか？その女性が過ぎ去ってしまひもしないうちに、これらの同じ問いがまた別の女性に向けられる。大いなるざわめきが起こる。生き生きとしたたしかなざわめき、崩壊のではなく建設のあのざわめきが。それは人間存在の外部にではなく、人間存在の内部に、と同時に他者の内部に、自己の正当化をひたすら追い求める人間的努力のざわめきなのだ。そこには何という美が、またともかく何という価値とたしかなさがあることか！ (O.C.II, p.152、『通底器』、pp.88-89)

ここにあるように、ブルトンの語りは、これらの女性たちを集合的な女性一般としては必ずしも捉えておらず、それぞれバラバラな個別的な存在、一人ひとりの女性であるかのようにとらえている。そしてそうした彼女らの複合的で多様な諸存在が生じさせる動的で騒擾的ざわめきのなかに、ブルトンは「美」（ざわめきの「瘻癩的な美」？）を見だしているのである。ブルトンのエクリチュールは次第次第に彼の思想を裏切って、そこから逸れて、別のことを綴っていつているように見える。

夢のなかに出てきた女性であれ、パリの街で声をかけた女性であれ、あるいは、過去にかいま見た記憶のなかの女性であれ、絵画や文学のなかの女性であれ、一瞬という短い時間のであいであるにしろ、それぞれがブルトンにとって、その時の「ただ一人の存在のための愛 (l'amour limité à un seul être)」(O.C.II, p.127、『通底器』、p.47) を受けるに値する女性であったことには変わりはない。逆もまたしかりであって、そのことはまた、ブルトンのもとを去ってしまったシュザンヌ・ミュザー

ルについてもいえることである。ブルトンの人生と作品のなかに深く入り込みしっかりとそれをとらえたシュザンヌであるが、彼女はずっと絶対的な存在としてそこに君臨し続けたわけではない。やがて、シュザンヌもそこを離れ、通過していった。彼女もまたそうした「通りすがりの女性」のひとりだったのではないだろうか。

おわりに——そして『狂気的愛』へ、さらにはその先へ

1934年春、ブルトンとジャコメッティは、パリの蚤の市を散策し、掘り出し物がないか探していた。この散策で彼らは二つの興味あるオブジェを見つける。一つは、中世の兜に似た金属製の半面マスク。もう一つは、マスクがあった数歩先の店で見つけた、木製のスプーンで、その柄の先には踵のついた小さな靴がくっついている。ジャコメッティは最初躊躇したものの、結局前者のオブジェを入手し、後者に対してブルトンは「ほとんど親和力的 (électif) な選択」(O.C.II, p.700.『狂気的愛』、p.67) を感じてすぐさま手に入れる。この挿話は、オブジェの写真付きで、同年、「見だされたオブジェの方程式 (Equation de l'objet trouvé)」というタイトルでベルギーのシュルレアリスム系の雑誌『ドキュマン34 (Documents 34)』に発表されるが³⁹⁾、その文章は後の1937年に『狂気的愛』の第三部に組み込まれることになる。

ところで、二人が入手したこれらの用途不明な不可思議な魅力のオブジェについては、ブルトン自身がすぐさま以下の断言的な結論を下している。

オブジェの発見は、ここで正確に夢と同じ役割を果たしている。なぜなら、この発見は、個人を、ためらいの感情という麻痺から解き放ち、勇気づけ、自分では乗り越えられないと思込んでいた障害も越えられるのだということを、理解させるからである。(O.C.II, p.700.『狂気的愛』、p.69)

この文章には、『通底器』参照のことと註が付けられているが、そこから読み取れることは、オブジェの発見は「夢」と同様に、本人が抱える人生の諸問題を乗り越える力、「欲望」を与えてくれるという機能を果たしているということである。

では、いかにしてこれらのオブジェの発見がそのような機能を果たし、またそのオブジェの形態や特徴はどのようなものであるのか、そしてどのようにして発見者の「欲望」に呼びかけ、それと合致していくのか、そのプロセスについては、フロイトの理論を活用しつつ、ブルトンが詳細な分析を加えているが、ここではそれを逐一追うことはできないので、必要最低限のオブジェの「方程式」とその機能・効能だけを簡単に確認するだけにとどめたい。

このオブジェは、発見の数カ月前にブルトンが目覚めた時に浮かんできた「サンドリヨン＝シンデレラの灰皿 (le cendrier Cendrillon)」(O.C.II, p.701.『狂気的愛』、p.71) という文句が出発点となっている。これは、音韻上の類似の語を含む目覚めの呼びかけという点で、まさに典型的な「オートマティックなメッセージ」と呼ぶことができるであろう。この呼びかけに促されて、ブルトンは同

様の灰皿を作成して欲しいとジャコメッティに依頼している。しかし、その約束が忘れられかけていた頃に、蚤の市での散策とオブジェの発見という出来事があったのである。まず、このスプーンオブジェは、灰皿の代理物であることは疑いがない。そして、このオブジェは、ブルトンの幼年期のペローの読書の記憶、そしてその形状の性的な連想によって、「スリッパ=スプーン=ペニス=このペニスの完全な彫刻原型」(O.C.II, p.707.『狂気的愛』、p.78)という方程式が形成される。そこからもう一つの方程式である、シンデレラの靴の材質の「ガラス (verre) = 毛皮 (vair)」(O.C.II, p.707.『狂気的愛』、p.78)もそこに連動している。オブジェ自体を結びつけている観念連想が両義的であると同時に、二つの方程式が並行して両義的に重なり合っている。そこからブルトンはこう結論づける、「スリッパはわたしにとっては未知の、唯一の女性を象徴していたのであり、この女性は、わたしの孤独感と、ならびにわたしの内部のある思い出を消し去らなければならないという感情の二つによって、壮麗化され、かつ劇化されていたのだと」(O.C.II, p.707.『狂気的愛』、p.79)。ここで言われている女性は、もちろん、シュザンヌ・ミュザールではない、他の新しい女性を暗示しているのである。

もう一つのマスクの方だが、ブルトンが雑誌に発表した文章を読んだ詩人ジョー・ブスケ (Joë BOUSQUET, 1897-1950) から後に手紙を受け取り、それが第一次大戦で使用された弾除けのマスクであることを知らされる(ブスケ自身、この大戦に参加しており、そこで負った傷により下半身麻痺の生活を一生強いられることになる)。いわば、マスクは不吉なオブジェであり、「死の本能」を表していると解釈されている。ジャコメッティが購入の際に一瞬、ためらったのはそのためである。

ところで、この二つのオブジェがテーマとなっているテキストには、オブジェのそうした機能以上に、重要な意味が込められているように思われる。この文章は、最初雑誌に発表され、その後『狂気的愛』に組み入れられたことはすでに述べたが、『狂気的愛』として発表されたテキストには二つの「追伸」が付いている。一つめの「追記」は1934年の日付で、雑誌『ドキュマン34』掲載時につけられたものであり、二つめの1936年の日付がある「追伸」は、『狂気的愛』の刊行時にさらに追加されたものである。重要なのは、この二つめの「追伸」である。

そこには、興味深いエピソードが書かれている。ブルトンとジャコメッティの二人がこれらのオブジェを見つけたのは蚤の市での散策の時だったのだが、その場にいたのはこの二人だけではなかったのである。彼らは見ていなかったが、彼らは「二人の人物に見られていた」(O.C.II, p.708.『狂気的愛』、p.82)。その二人のうちの一はシュザンヌ・ミュザールであり、もう一人は彼女の連れの男性であったことがほのめかされている。ほのめかされている、というのは、「追記」の文章では例のごとくシュザンヌの名前がはっきりと記されておらず、『ナジャ』や『通底器』で使われた同じイニシャルの「X」とだけ書かれているからである。そしてこの通りすがりの二人は、「このマスクに好奇心をそそられながらも、彼女はわたしと同じくこれを元の場所に戻したのである。」(O.C.II, p.708.『狂気的愛』、p.82) この奇妙な出会いそこない、すれ違い、そしてシュザンヌの動作について、ブルトンはこう語っている。

この出会いは、彼女は知っていてわたしは知らず、かくも明確にこのオブジェをめぐって（なかば暗く泣かば明るいXの形をした）奇妙な形象を形づくっている。こういったことから、わたしは次のように考えている——、この瞬間、マスクは愛の対象を失ったことでわたしを長いあいだ支配していた《死の本能》を、さらに加速させている。それは、数歩先でのスプーンの見つけで満たされる手段を見つけることになる性的本能に対抗している、と。（*O.C.II*, pp.708–709.『狂気的愛』、p.82）

ここの場面は、とりあえず、このように読めるだろう。『通底器』を書いていた頃、ブルトンは、シュザンヌの不在に耐えられず、一時は自殺を考えたほどであったことはすべに述べた。それが、マスクというオブジェが表している「死の本能」に対応する。しかし、ブルトンは、結局それを手に入れることなく、別のオブジェ「サンドリヨンのスプーン」（性の本能）のほうを選び取る。つまり、ブルトンは、シュザンヌの魅力・憑依の呪縛から解き放たれて、新たな女性との愛の方向へと進んでいったのである。

そして、周知のように、『狂気的愛』という書物において、このエピソードがテーマとなっている第三章の次の第四章には「ひまわりの夜」というテキストが続いている。ブルトンが1923年に書いた「ひまわり（Tournesol）」（同年出版の詩集『地の光（Clair de terre）』に収められている）という詩のなかに描かれた内容と架空の女性が、その後の現実世界に現れて、ブルトンがその女性に出会うというものである。後に「客観的偶然（hasard objectif）」として概念化されるこのエピソードが語られているテキストである。女性の名前は、ジャクリーヌ・ランバ、ブルトンの再婚相手となる女性である。二人の間には、娘オーブが生まれている。だから、本のタイトルにあるように、次の「狂気的愛（l'amour fou）」はすでにはじまっているのである⁴⁰。

ところで、オーブも含めたシュザンヌとジャクリーヌの二人は、後に出会っており、彼女たちの仲むつまじく戯れている写真が載っているから、非常に仲が良かったようだ。これも奇妙といえれば奇妙な話である。このあともブルトンの人生においてシュザンヌはしばしば登場し、彼女との友愛的な付き合いはまだ続くのであるが、とりあえずはシュザンヌとブルトンとの「狂気的愛（l'amour-folie）」に一区切りついたようだから、この論考もここで終わりたいところだが、その後のいきさつがそれを許してくれない。

『狂気的愛』の第四章には、不吉なエピソードが紹介されている。1936年夏、ブルターニュ地方のロリアンに滞在することになったブルトン夫妻は、二人で浜辺を散策して、近くにある一軒の空き家に近づく。その家を見ていると、そして近所にいると、どうしても気分が落ち込んで、「不気味な印象」（*O.C.II*, p.770, 『狂気的愛』、p.224）をめぐり去ることができない。この印象と感覚を受けたのはブルトン一人ではなく、一緒にいたジャクリーヌもまた同じであった。「そういうわけで、わたしは難なく次のことを認めた。二人が耐え忍んだばかりの苦しみに根拠はまったくなかったが、その何でもないものが、現実には私たちの愛を窮地に陥れたのだと。わたしたちは一時的に相

手に絶望せざるをえなかったが、まさにその意味では、わたしたちをとりこにしていたのは妄想のみなのである」(O.C.II, p.771、『狂気的愛』、p.226) 散策の後で両親の家に戻ってから、二人は、その家はロック村にある悪名高いミシェル・アンリオの家であり、ミシェルは妻殺しの殺人犯であったことを知らされる。ブルトン夫妻は、その過去の凶行事件の場所にたまたまいあわせて、変調をきたしたのである。この不吉な遭遇は偶然といえるかもしれないが、その後の二人の関係は「妄想」だけで終わることはなかった。

1936年の9月から10月にかけて、ジャクリーヌは、幼いオーブをブルトンに預けたまま、コルシカ島へ一人旅立つという事件が起きる。

第二次大戦に入ると、ブルトン一家三人は、戦火を避けるために、マルティニック島を經由してニューヨークへ行く船に乗り込む(船上で、レヴィ＝ストロースに出会い友情を結ぶ)。亡命の始まりである。1942年、二人は離婚し、ジャクリーヌは他の男性と再婚する。ジャクリーヌとの「狂気的愛」もまた永続するものではなかったのである。その後、ブルトンは最後の伴侶であるエリザと結婚するが、ブルトンが晩年に好んで過ごしたサン＝シール・ラ・ポピーの別荘で、ブルトン、エリザ、バンジャマン・ペレ、そしてシュザンヌ・ミュザールが楽し気に夕食をしている写真が残っている⁴¹⁾。これほどまでにブルトンの周囲に現れては消え、また現れるシュザンヌ・ミュザールは、もはや一回性の「通りすがりの女性」というよりも、むしろブルトンの作品と人生の端から端を「横断する」女性だったのかもしれない。

註

本稿でのアンドレ・ブルトンの著作からの引用は、特別な指示がない限り、André BRETON, *Œuvres complètes*, tome I, tome II, tome III, tome IV, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1988–2008に依拠しつつ、O.C. と略記し、引用の末尾に巻数とページ数のみを付した。

また本稿で扱う、ブルトンの主著には、邦訳があるが、それぞれ以下の訳書を使用した。引用の際には、フラン語テキストの出典、そして邦訳の題名と引用ページ数を併記した。必要に応じて、訳文を変えた箇所があることをお断りしておきたい。『ナジャ』、巖谷國士訳、岩波文庫、2003。『通底器』、足立和浩訳、現代思想社、1978。『狂気的愛』、海老坂武訳、光文社古典新訳文庫、2008。

- 1) Charles BAUDELAIRE, *Œuvres complètes tome I*, Bibliothèque de la Pléiade / Gallimard, 1975, p.93 (シャルル・ボードレール、「通りすがりの女^{ひと}に」、『ボードレール全集 I 悪の華』、阿部良雄訳、筑摩書房、1983, p.180:「きらめく光……それから夜! —はかなく消えた美しい女^{ひと}/ その眼差しが、私をたちまち魅^{ひと}らせた女よ、/ 私はもはや、永遠の中でしか、きみに会わないのだろうか? / 違う場所で、ここから遠く! もうおそい! おそらくは、もう決して! / なぜなら、きみの遁れゆく先を私は知らず、私のゆく先を君は知らぬ、/ おお、私が愛したであろうきみ、おお、そうと知っていたきみよ!」)
- 2) 濱田明・田淵晉也・川上勉『ダダ・シュルレアリスムを学ぶ人のために』、世界思想社、1998、pp.131-134 およびpp.72-74参照。ジェルメーヌ・ベルトンのフォトモンタージュの初出は、『シュルレアリスム革命』誌第一号(1924年12月1日)である(*La Révolution surréaliste*, Jean Michel Place (réimpression), 1991, p.17)。マグリットの作品は有名であるので、いたるところで見ることができるだろう。
- 3) CALISTO, *La Femme surréaliste : de la métaphore à la métonymie*, L'Harmattan, 2013.

- 4) シュルレアリスムと性差やジェンダーに関するすでに古典ともいえる評論に、Xavière GAUTIER, *Surréalisme et la sexualité*, Idées / Gallimard, 1979 (グザヴィエル・ゴーチエ『シュルレアリスムと性』、三好郁朗訳、平凡社ライブラリー、2005)がある。また、ややシュルレアリスムの文脈から外れるが、同様のテーマの著作に以下のものがある。Anne-Marie DARGIGNA, *Les Châteaux d'Eros ou l'infortune du sexe des femmes*, François Maspero, 1980。出版年からも推察できるであろうが、いずれも女性解放運動が活発な時期と連動している。
- 5) CALISTO, *op. cit.* 参照のこと。ピカソの恋人であったドラ・マールは、写真家兼モデルとして活躍している。ウニカ・チュルンに関しては、自伝の翻訳が出版されている（『ジャスミン男 分裂病女性の体験の記録』、西丸四方訳、みすず書房、1997）。そしてクロード・カーンについては、彼女のモノグラフを日本語で読むことができる（永井敦子『クロード・カーン 鏡のなかのあなた』、水声社、2010）。
- 6) このテーマに関する先行研究としては、以下があり、大いに参考にさせていただいた。
 松浦寿輝「「解釈」と「置換」——『通底器』あるいは反＝解釈学の装置』、『謎・死・闘 フランス文学論集成』、筑摩書房、1997。
 ——、「文字・太陽・遭遇」、同書。
 鈴木雅雄「ひまわりは誰の花——『狂気的愛』と客観的偶然の問題』、『ユリイカ 増頁特集 アンドレ・ブルトン シュルレアリスムの法王』、青土社、1991年12月号、pp.50-71。
 Georges SEBBAG, *André Breton L'Amour-folie*, Jean Michel Place, 2004。
 ——, 《L'Amour-folie d'André Breton》, *Au Grand Jour Lettres (1920-1930) -Un Album André À Simone Breton*, RUED'ULM, 2020, pp.152-159
- ところで、こういった探究が陥りがちな陥穽は、上記の先行研究者もすでに述べているように、下手に扱うと、対象がとめどなく広がっていき、收拾がつかなくなったり、いわゆるこじつけの妄想的解釈になってしまうことである。本稿もところどころそういった暴走に走るきらいがなきにしもあらずであるが、しかしながら、かといって、あまりにも厳格に探究対象を狭めたり、新たな発見へつながるヒントとなる解釈の可能性を切り捨てたりすれば、このテーマの持っているポテンシャルな意義や魅力を削いでしまうことになるだろう。本稿では、できるだけ信頼できる資料や証言にあたり、慎重に裏付けを取るよう留意しながら、そここのところのバランスを生かすように心がけた。ブルトン自身も次のように言っている。「重要なのはやはり、迷路のなかで自分がどこにいるのか、その位置を知ることだ。解釈妄想は、自分の欲望がわかっていない人間が、あの**標識の森** (forêt d'indices) のなかで怖れを抱くときにのみ始まる。けれども、私は断言する。自分の欲望の外にあるものに、一瞬でも身を任せるくらいなら、注意力はむしろ自分の手首を打ち砕いてしまうだろう、と」(O.C.II, p. 685, 『狂気的愛』、p.28)。この言葉を本稿のもう一つのエピグラフとしたい。
- 7) フランス語には次のようなことわざがある。「Dis-moi qui tu hantes [fréquentes], (et) je te dirai qui tu es. 君が付き合っている人の名を言いたまえ、そうしたら君の人の柄を言おう。(人はその交友によって判断できる)」(渡辺高明/田中貞夫共編『フランス語ことわざ辞典』、白水社、1983(1977)、p.139)。ここで使われている「付き合う (hanter)」という動詞は、また「幽霊などが出る。特定の場所や建物にとり憑く」、「観念や幻想が取りつく、つきまとう」という意味があり、ブルトンは、この二つの意味を掛け合わせて使っているのである。
- 8) 本論のキーワードの一つとなる「狂気的愛 (l'amour-folie)」について一言断っておきたい。これは、本論で参照しているジョルジュ・セバックの著作のタイトルであるが、周知のように酷似した表現がブルトンの著作のタイトルのなかにもある。『狂気的愛 (L'amour fou)』(1937)がそれである。後者の方は、「狂喜的愛」と訳されることもあるが、「熱狂的な愛」というどちらかという肯定的な意味を持って使われているのに対し、本稿のキーワードの後者は、名詞「狂気 (folie)」が連結され、まさに「狂気としての愛」、「気のふれた愛」という意味であり否定的なイメージを与える。だが、使う人によってその意味合いは異なってくるだろう。ちなみにこの言葉は、後で述べるように、ブルトンの妻シモーヌが使った言葉である (André

BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920–1960*, Gallimard, 2016.)。

- 9) シュザンヌ・ミュザールが書き残した「告白の手記」は、以下の著作の第一章に収められている。Georges SEBBAG, *op.cit.*, pp.9–49.

なお、以下の出来事の記述と年代は、このセバックの著作の他に、基本的に、下記の文献に基づいている。

Marguerite BONNET, *André Breton Naissance de l'aventure surréaliste*, José Corti, 1988.

Henri BEHAR, *André Breton Le Grand Indésirable*, Calmann-Lévy, 1900 (アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』、塚原史・谷昌親訳、思潮社、1997)。

Mark POLIZZOTTI, *André Breton*, Gallimard, 1999.

André BRETON, *O.C. t. I と t. II の《Chronologie》*。

André Breton – La Beauté convulsive, Centre Georges Pompidou, 1991.

Dictionnaire André Breton, sous la direction d' Henri BEHAR, Classiques Garnier, 2013.

- 10) このパリ上京の際に一緒だった女性について、興味深いエピソードがある。この友人は本名をアニー・ゼマ、自称エレヌ・ゼマ (Hélène ZÉMA) と名乗っていた。その後、なぜかシュザンヌのファーストネームを取ってつけ、シュザンヌ・ゼマ (Suzanne ZÉMA)、そしてついには、シュザンヌ・ミュザールと名乗ることになる。二人のシュザンヌ・ミュザールが存在することになったのである。そのことを証明する写真があり、金髪の髪をたくし上げりボンで結わえ付け、二人で顔を寄せ合い並んで写っている姿を見ると、双子のように瓜二つで見分けがつかないほどである。これはある意味からいうと、一人の人間による別の人格の乗り取りであり、また分身の見事な例といえるであろう。この二人目の偽シュザンヌ・ミュザールは、パリ上京後、シュルレアリストのロジェ・ヴィトラック、そしてジョルジュ・サドゥールという恋人を得ている。恋愛まで、ブルトンそっくりなのである。この二人が写った写真は、シュザンヌのポートレートを配したフォトアルバムとして残され、ブルトンが保管していたという。ちなみに、この二人のシュザンヌ・ミュザールについて最初に言及したのは、アンドレ・ティリオン『革命なき革命者たち (Révolutionnaires sans Révolution)』(初版1972, 決定版1988)で、この著作の内容の真偽について、ブルトンの死後、シュザンヌとティリオンは、事実関係をめぐって、手紙のやり取りをしている。Georges SEBBAG, *op.cit.*, pp.74–76 および pp.203–211 参照。
- 11) この二人の会話について、即断はできないが、アンリ・ベアールは、初対面のときにブルトンとシュザンヌがカフェ・シラノでした会話であるかのように記述している。(Henri BEHAR, *op.cit.*, p.203 (アンリ・ベアール、前掲書、p.231)) しかし、ジョルジュ・セバックによれば、それは、二人の逃避行先のトゥーロンでの出来事であるとしている (Georges SEBBAG, *op.cit.*, p.113, p.137)。また、セバックの著作の冒頭に収められているシュザンヌ自身の「告白の手記」もそれを裏づけている (SEBBAG, *op.cit.*, pp.9–49)。
- 12) Georges SEBBAG, *Ibid.*, p.36. この「告白の手記」が書かれたのは、1978年から1980年の間であると推定されている。そして、このテキストは、シュザンヌが晩年を過ごした自宅のフェイ＝シュール＝ボワで、1988年7月、セバック夫妻がシュザンヌに招かれて、インタビューをした折に譲られたものであるという。また、シュザンヌには、生前、発表された手記がもう一つある。タイトルは、「服従しない通りすがりの女 (La Passagère insoumise)」であり、1978年のマルセル・ジャンの『シュルレアリスムの自伝 (Autobiographie du surréalisme)』(英語版は、1980年、*The Autobiography of Surrealism*として出版)のなかで発表されているという。そこで、シュザンヌはオーベルヴィリエの幼年期に関して次のように書いている。「彼 [=ブルトン] に教えてやったのはわたしではなかったかしら。少女のころ、わたしはこの郊外の十字路の一つで彼と確実にすれちがっていたはずだし、パリで医学生だった彼は、毎晩、家族のもとに帰ってきていたことを(……)わたしたちはこの偶然に、わたしたちが後年、運命的な出会いをするというのだという、奇妙な巡り合わせの価値を与えていたのだった」(Georges SEBBAG, *op.cit.*, p.213)。このテキストを読むと、少なくともシュザンヌは、二人の出会いが、運命的なある種の「客観的偶然」に属するものであるという印象を与えようと

していたのではないかと考えられる。

- 13) André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920–1960, op.cit.*, p.344.
- 14) Georges SEBBAG, *op.cit.*, p.36, p.115 他参照。この逃避行、そしてその報道は、ブルトンとシュザンヌの愛の逃避行という個人的な事件にとどまらない。この頃、いわゆる初期シュルレアリスムのメンバーの間に亀裂が入りはじめ、この二人の事件が外部へ漏れて、いささか滑稽さを帯びた記事となったのは、内通者がいたのではないかという疑いがもたれ、そして誰がその内通者なのかという詮索が行われている。結局その犯人はわからずじまいであるが、最終的には、1929年12月『シュルレアリスム第二宣言』が発表され、ブルトンと親しかったメンバーの何人かが激しく弾劾されていることは、そのことと無関係ではないだろう。
- 15) Georges SEBBAG, *ibid.*, pp.112–113およびp.36参照のこと。
- 16) Georges SEBBAG, *Ibid.*, p.38. さらには、後の1928年10月、シュザンヌとの関係、妻シモーヌとの関係が破綻のきざしを示しはじめると、絶望に駆られて精神的に混乱したブルトンは、それを解決する方法として、シュザンヌ＝アンドレ＝シモーヌという三人の関係を築くことを本気で夢想する。この妄想的ともいえる夢想については、1928年10月13日付のシモーヌ宛の手紙を参照のこと（André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920–1960, op.cit.*, p.356. そしてまた、Georges SEBBAG, *op.cit.*, pp.158–159） そうなると、ブルトンはさておき、シモーヌがシュザンヌをどう思っていたか、シュザンヌに好意を持っていたのか、夫との関係を認めていたのか、そして三人での生活を認めていたのか、その本心が気になるところである。シモーヌは、当時、頻繁に手紙を交わしていた親しい友人ドゥニーズ・レヴィーへ宛てた1928年9月6日付の手紙で、こう書いている。「わたしはシュザンヌに対して、なんだか猜疑心を拭い去ることができないの。彼、アンドレが、彼女を必要としているから、アンドレに対してはわたしがこの猜疑心を抱いていないかのように振るまっているけれど。でも、わたしは知っている、この女は、わたしだったら自分の生涯をかけてでもやろうとしなかったことを何でもするだろうと、アンドレがこの世界で表現していること、彼ができること、そしてわたしを犠牲にしてまでも、彼のすべてを独り占めにするだろうことを。」（Simone Breton, *Lettres à Denise Lévy*, Editions Joelle Losfeld, 2005, p.241） また、同年9月（10月？）の手紙では、こう告白している。「アンドレがわたしに吹き込もうとしている〔シュザンヌに対する〕信頼は、わたしのなかで、ごく当然に、すべてを投げ捨ててしまいたいというわたしの思いと葛藤しているよ。信じられないわ、アンドレは！彼は、シュザンヌの要求、彼が彼女を必要としていること、それと彼の人生のなかの私の存在をどうやったら両立させられるかと思っているのかしら。彼は自分がそれを信じ、希望し、欲していることをわたしに強く訴えるの。私は待っているだけ。」（*Ibid.*, pp.246–247） やはりこのいびつな三角関係の背後には、シモーヌの忍従と自己犠牲があったのである。
- 17) この初めから望みのない、一方的なリーズへの恋愛については、リーズの再婚で決着がつく。その後、リーズは、小説家、詩人として活動を続け、ブルトンとも、愛情抜きのつきあいをつづけていく。1954年、リーズは、ブルトン、ジュリアン・グラック、ジャン・タルデューらとともに、ラジオ番組の朗読のための散文作品『四葉のクローバー（Farouche à quatre feuilles）』（1954）の制作に参加している。
- 18) 1927年7月29日受けの手紙で、ブルトンはリーズへの愛について、シモーヌに弁解している。「ぼくはずっととり憑かれて（hanté）いるんだよ。『狂気的愛（l'amour-folie）』だわ、と君は言う。それは確かかどうかわからない。身近にある、単純な不思議さだよ。例えば、「眠り」というものが引き起こす混乱とそれは何ら変わらない。少しばかり、それよりも強力かもしれないが、それだけのことだ」（André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920–1960, op.cit.*, p 275）
- 19) 以下のシモーヌとモリーズとの関係については、次の著書を参照にした。Au Grand Jour *Lettres (1920–1930) –Un Album André À Simone Breton, op.cit.*. シモーヌのマックス・モリーズに対する最初の愛情は、1923年1月11日に、ドゥニーズに送られた手紙で告白されている（Simone Breton, *op.cit.*, p.114）。一方、ブルトンの方

- であるが、同じシュルレアリストのマルセル・ノルに対して、シモーヌがモリーズを愛しているかどうか尋ねた、ということをも1924年3月27日付の手紙でシモーヌはドゥニーズに報告している (Simone Breton, *op.cit.*, p.170)。やはり、ブルトンも疑いだけは抱いていたわけである。ともあれ、その後もドゥニーズ宛ての手紙にはマックス・モリーズの名前が頻出し、シモーヌの彼に対する愛情の深まりを読むことができる。
- 20) アラゴンは一時ドゥニーズに熱中して結婚を申し込んだが断られる。その時送られた、ドゥニーズへのアラゴンの手紙は、Aragon, *Lettres à Denise*, Maurice Nadeau, 1997 (1994) として出版されている。そして、後年書かれるアラゴンの小説『オーレリアン (Aurélien)』(1944)の女性主人公のモデルは彼女である。
- 21) 1928年11月15日付の手紙で、ブルトンは、こう怒りをぶちまけている。「そして君は、すでにぼくが知っているものだとされていたが、自らのこの上ないおめでたさでぼくが知らなかった、他の話もしてくれた」 (André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920-1960*, *op.cit.*, pp.360-361.)
- 22) Simone Breton, *op.cit.*, p.218.
- 23) 『ナジャ』のなかにはこういう一節がある。「アヴィニョンの方へと驚くばかりに長くのびてゆく風景で、例の法王の宮殿は冬の夜とどしゃぶりの雨に耐えられなかったし、古い橋はとうとう童謡の重みに負けてしまった。そしてそこでは、かなり最近になってから、ひとつのすばらしい、心をいつわらない手が、夜明け (Aubes) という文字を記す大きな空色の標識盤を指し示したのだ」 (*O.C.I*, p.749. 『ナジャ』, p.181)。また、ブルトンがシュザンヌがシモーヌに宛てた11月25日の手紙を参照のこと。André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920-1960*, *op.cit.*, pp.294-295.
- 24) *Archives du surréalisme 4 Recherches sur la sexualité janvier 1928-août 1932*, Gallimard, 1990, p.104 (『性に関する探究』、野崎歓訳、白水社、1993, p.118)。訳文はこの邦訳を利用させていただいた。
- 25) Georges SEBBAG, *Ibid.*, pp.146-145.
- 26) Benjamin PERÉT, 《La nature dévore le progrès et le dépasse》, *Minotaure* no10, hiver, pp.20-21, Albert Skira (réimpression), 1981. このテキストは、以下に再録されている。Benjamin Péret, *OEuvres Complètes tome 7*, José Corti, 1995, pp.38-39. なお、ブルトン全集Ⅱの校訂者マルグリット・ボネによれば、ここで列車 (機関車) が想起されているのは、詩人ブレーズ・サンドラールの詩に影響されてではないかという註が付けられている。それ以上に興味深いのは、後に『白髪拳銃』(1932)に収録されるブルトン自身の詩「郵便配達夫シュヴァール」の一節に、この機関車そのまま登場していることである。「気圧計の巨大な根に悩まされている機関車 / (……) / 原始林のなかで傷だらけの汽灌を嘆いている機関車」 (*O.C.II*, p.90. 『アンドレ・ブルトン集成4』、菅野昭正訳、人文書院、1970, p.57)。
- 27) シモーヌに宛てた、1928年10月13日の手紙参照。André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920-1960*, *op.cit.*, pp.353-354.
- 28) 「サン島」がブルトンにとって特権的な場であること、『通底器』におけるそのあり方については、以下の拙論を参照されたい。泉谷安規、「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(Ⅲ)」、『人文社会科学論叢』第7号、弘前大学人文社会科学部、2019年。上記の論文を書いて時点では筆者は、「サン島」がなぜ、ブルトンの特権的場となっているのかの理由がつかめていなかったが、1928年5月に、ブルトンはそこでシュザンヌと一緒に滞在していた場所であったことが今回確認できた。こちらの不注意をお詫びして、訂正しておきたい。
- 29) Henri BEHAR, *op.cit.*, pp.235-244 (アンリ・ベアール、前掲書、pp.260-270)
- 30) 泉谷安規、「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(Ⅰ)」、『人文社会科学論叢』(人文科学篇)第24号、弘前大学人文学部、2010年、pp.1-12。
——「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(Ⅱ)」、『人文社会科学論叢』第5号、弘前大学人文社会科学部、2018年、pp.17-34。
——「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(Ⅲ)」、『人文社会科学論叢』第7号、

弘前大学人文社会科学部、2019年、pp.13-40。

- 31) この恐怖症のもう一つの解釈は、ブルトン自身が夢の「分析」で述べている次のようなものである。「私はあるとき、彼女がこの恐怖感を徹底的に克服する手助けになるかも知れないと考えて、彼女にこう請けあってやったことがある。ここ数カ月彼女が恐怖を感じるのが前よりも少なくなったのは、おそらく彼女が結婚したことを、そしてその結果俗にいう『車を車庫におさめた』(garée des voitures) ことを自覚しているからに違いあるまい、と。それを聞いて、彼女は何かはっとした様子だった」(O.C.II, p.123、『通底器』、p.39)。ここで「結婚」とはもちろん、ベルルとの結婚を指している。
- 32) André BRETON, *Lettres à Simone Kahn 1920-1960, op.cit.*, p.347.
- 33) 1988年にセバックが行ったインタビューで、シュザンヌはこのビデの挿話について答えて、これを送ったのは、小さいころ好意を持っていた幼馴染の男の子で、その子はシュザンヌのことを「僕の太陽 (Mon soleil)」と呼んでいたという。「わたしの髪の色で。わたしは金髪だったから。わたしの髪は、金髪、濃いブロンドだったの、もちろん偽物じゃないわ」(Georges SEBBAG, *Ibid.*, p.231)
- 34) 完璧とっていいほどの合理的解釈を施された自身の夢が記述されている『通底器』の明晰なテキストの第一部、そして目覚めているにもかかわらず、夢のなかの出来事のような曖昧模糊としている現実世界が描かれているテキストの第二部との、この奇妙な逆転現象と浸透作用については、以下を参照。松浦寿輝「『解釈』と『置換』——『通底器』あるいは反=解釈学の装置」、前掲書。
- 35) 女性の「眼」に対するブルトンの偏愛は、かなり以前から認められる。ブルトンのアルバムには、シュザンヌの顔写真があるが目の部分だけを切り取った部分写真もある。リーズ・ドゥアルムの写真についてもまた同様である。それになにより、作品『ナジャ』のなかにおさめられている、ナジャの眼を重ねた写真「彼女の羊歯の眼 (Ses yeux de fougère...)」(O.C.I. p.715、『ナジャ』、p.131) はごく有名であろう。
- 36) 揺れる太陽=ひまわりというイメージは、ブルトンの詩「警戒」を想起させる。「パリの町でサン=ジャックの塔は / ひまわりのように揺れている」(『白髪の拳銃』)、菅野昭正訳、『アンドレ・ブルトン集成4』、p.64 (O.C.II, p.94) そして、クロード・ルロワは、使用されている語彙の共通性において、ブルトンがここでボードレールの詩「通りすがりの女」を念頭に置いていると指摘している (Claude LEROY, *Le Mythe de la passante de Baudelaire à Mandiargues*, PUF / Perspectives littéraires, 2021 (1999), p.170)
- 37) O.C.II, pp.1402-1403.
- 38) セバックもまた、この『笑い』のデッサンのエピソードを取り上げて、同様の結論を引き出している。Georges SEBBAG, *op.cit.*, pp.178-180 そしてまた、Georges SEBBAG, *L'Imprononçable jour de ma naissance Andre Breton*, Jean Michel Place, 1988 の15の部分 (この著書にはページ数がないが、項目ごとにナンバーがふってある)。両書ともに、元となった『笑い』のデッサンが採録されている。
- 39) 復刻版があり、その中で読むことができる。Documents 34 *Intervention surréaliste*, coll. L'Arc, Duponchelle, 1990, pp.16-24.
- 40) この「ひまわり」のエピソードについては、次の論文で詳細に論じられている。鈴木雅雄「ひまわりは誰の花——『狂気的愛』と客観的偶然の問題」、前掲論文。
- 41) Georges SEBBAG, *op.cit.* にその写真が掲載されている。